

子育てひろば「みなみん」におけるアンケート調査から見えてくるもの

春日由美
金子幸美
黒川久美

A Study through questionnaires about Kosodate-hiroba "Minamin"
(Supporting Center for Raising Children)

KASUGA Yumi, KANEKO Sachi, KUROKAWA Hisami

キーワード：子育て支援 子育てひろば 保護者 親子 学生ボランティア

概要：本研究では、南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターの新たな取り組みとしてスタートさせた子育てひろば「みなみん」における保護者と学生へのアンケートから見えてくるものを検討した。その結果、初年度の取り組みながらも総じて親子にとって満足できる場所を提供することができ、学生にとっても親子との触れ合いを重ねることで自信を持って保護者や子どもと関わることができるようになるなど、学内の子育て支援センターの意義を明らかにすることができた。

1. はじめに

子育てひろばとは、主に3歳未満の子どもを持つ親が子どもと共に集い、遊びや交流を行う場である。子育て不安・子育ての悩みを抱える親や、孤独な子育て状況にある親にとって、こうした場が地域にあることは、安心の子育てへの一歩にもなるものである。そこで、人間発達学部附属子育て支援センターでは、新たな取り組みとして、子育てひろば「みなみん」を2015年度よりスタートさせた。昨年度、関心のある学生たちと共同で準備を行い、3月13日にトライアルを実施し、30名を超える親子が集い、盛況であった。これを踏まえて、今年度より本格実施することにした。場所は、子育て支援センターのプレイルームを使用する。子育てひろば「みなみん」の運営・実施にあたっては、学生の参画を大事にして取り組みを進めている。

地域の親子が安心して利用できる場を開設することは、将来保育士や幼稚園教諭等を目指す学生にとって、学内という身近なところで、恒常的に親子と触れ合うことが可能となり、まさにフィールド・ワークの場となるものである。また本学の地域貢献にとっても望ましいと考える。

「みなみん」の取り組みの概要については、「2015年人間発達学部附属子育て支援センター活

動報告」中にまとめている（春日ら、2016）。

2. 保護者へのアンケート調査

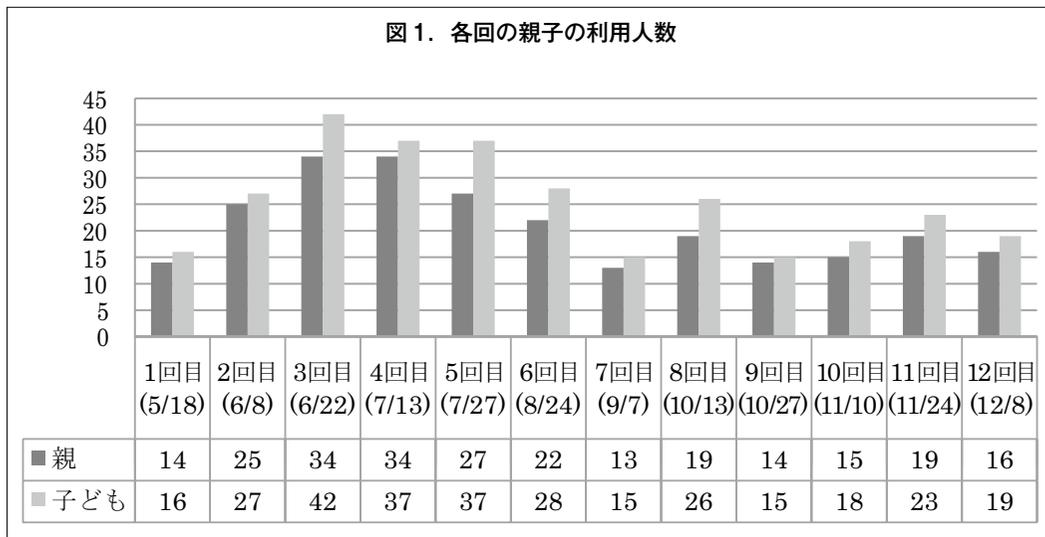
(1) 保護者の利用状況

2015年5月にみなみんを本格的にスタートさせて以降、12月までの計12回で利用した保護者は延べ252人、子どもは延べ303人であった（図1参照）。もっとも利用者が多かったのが、第3回目であり、これは、第2回目の様子が6月17日付けの宮崎日日新聞で紹介されたことが要因だと思われる。その後も、複数のメディアに取り上げられたこともあり、利用者は毎回10組を超えており、「みなみん」が地域の子育て支援の場として子育て家庭に認知されたとみることができよう。

(2) 保護者へのアンケート結果

利用後の保護者に、今後のみなみんの運営に生かす目的で毎回アンケート調査を実施した。アンケートの内容は、①みなみん全体について、②学生の対応について、③帰りの会について、④みなみんを知ったきっかけについて、⑤他の支援センターの利用の有無、⑥次回の利用について、の6点である。アンケートの回答人数は延べ183人で、回答率は72.6%であった。

図1. 各回の親子の利用人数



みなみん全体については、96%の利用者が良かったと回答（図2参照）していることからほとんどの利用者が満足したことが窺える。同じく、学生の対応、帰りの会に関しても、それぞれ97%（図3参照）、91%（図4参照）の利用者が良かったと回答しており、利用者の9割以上が満足する内容で実施することができたと言える。

図2. 「みなみん」はいかがでしたか

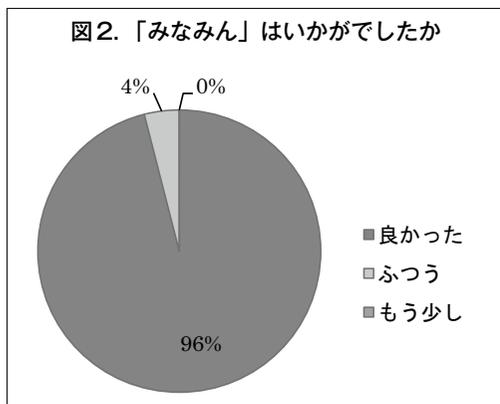


図3. 学生の対応はいかがでしたか

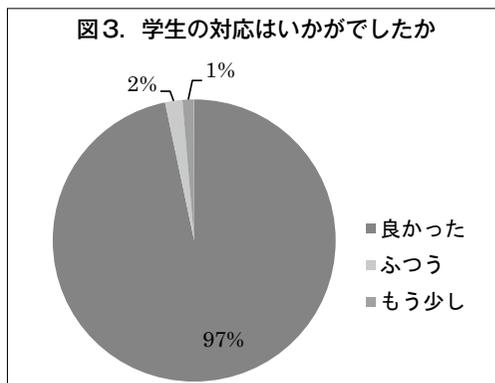
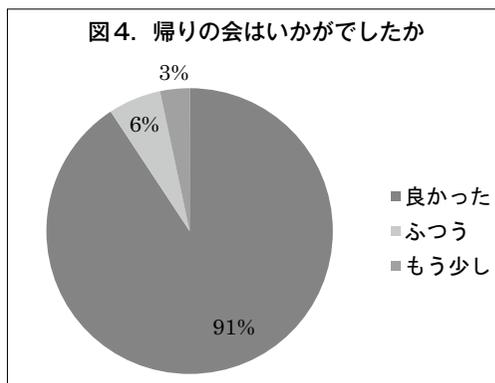


図4. 帰りの会はいかがでしたか



次に、みなみんを知るきっかけについて尋ねたところ、第1回目～第3回目までは店頭のポスターや他の支援センターに置かれたチラシと回答した人が大半だったが、回数を重ねるごとに、

「知人の紹介」と回答する人が約半数を占める結果となった（表1参照）。全体で見ても「知人の紹介」と回答した人が36%と最も多い（図5参照）。5月の本格実施に向けて、4月は「みなみん」について広く知ってもらうために、学生ボランティアが中心となり、地域の店舗や施設に広報活動に行き、多くの時間を費やした。しかし、実施回数を重ねるごとに、知人の紹介により利用する人が増えてきたことから、今後は、広報活動よりも実施に当たっての準備や実施後の反省など、内容の充実に時間を費やすことが可能になると考えられる。

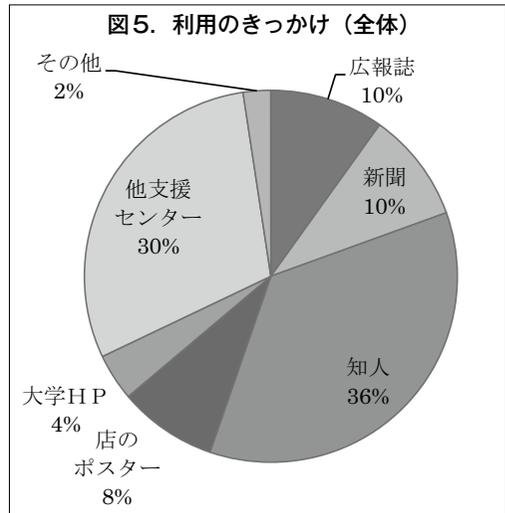
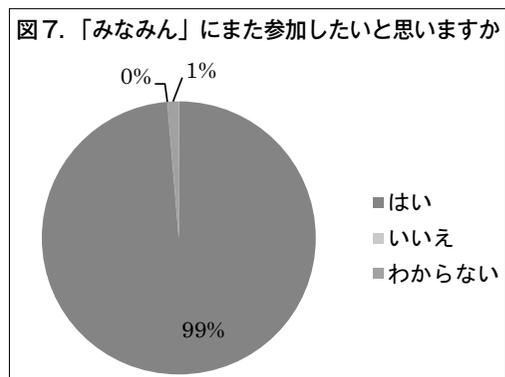
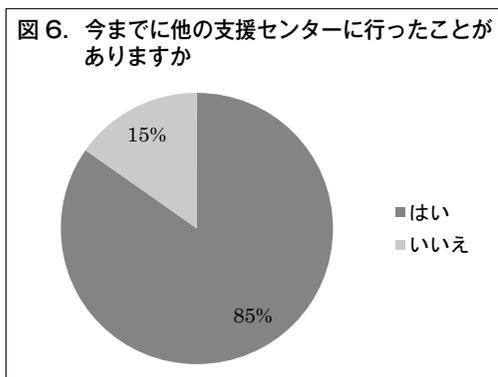


表1. 利用のきっかけ

	広報誌	新聞	知人	店のポスター	大学HP	他支援センター	その他
1回目	6%	13%	13%	27%	7%	27%	6%
2回目	0%	16%	21%	21%	5%	37%	0%
3回目	11%	18%	19%	26%	4%	22%	0%
4回目	5%	18%	9%	9%	5%	45%	9%
5回目	35%	6%	29%	6%	0%	24%	0%
6回目	10%	20%	50%	0%	0%	20%	0%
7回目	12%	12%	50%	13%	0%	13%	0%
8回目	7%	7%	20%	7%	13%	46%	0%
9回目	7%	0%	53%	0%	0%	27%	13%
10回目	0%	8%	50%	0%	8%	34%	0%
11回目	0%	8%	50%	0%	8%	34%	0%
12回目	13%	0%	56%	6%	0%	25%	0%

他の支援センターの利用の有無については、「ある」が85%、「ない」が15%であった（図6参照）。また、今後も利用したいかとの問いには、99%が「はい」と回答しており（図7参照）、初

めての子育て支援センター利用者にとっても、また利用したいと思ってもらえる場を提供することができたと言える結果であった。



3. 参加学生へのアンケート調査

(1) 学生の参加状況

みなみに参加した学生に対し、毎回アンケート調査を行った。項目は15項目からなり、「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」の4件法である。項目内容は、子どもや保護者への関わりが好きかや自信があるか、当日のボランティアでの子どもや保護者への関わりの楽しさ等や発見や学びがあったか、今後の子どもや保護者への関わりやボランティアへの意欲について問うものである（詳細は表4を参照）。なお、アン

ケート内の文章において、アンケートへの協力は自由であり、アンケートに答えないことで不利益を被ることはないことを伝えている。

学生のアンケート提出回数を表2に示す。アンケートを提出した学生だけでも、77名の学生がいた。また1年生から4年生までまんべんなく参加していたと考えられる。ただし、みなみに参加していても、アンケートを提出していない学生もいると考えられる。なお自主的なボランティアでなく、授業の一環として1回のみ参加した3年生・4年生の学生もいる。

表2. アンケート提出回数の内訳

提出回数	人数	1年生	2年生	3年生	4年生
1回	40	4	1	10	25
2回	20	7	5	2	6
3回	12	1	8	3	0
4回	1	1	0	0	0
5回	1	0	0	1	0
6回	1	0	0	0	1
7回	1	0	0	0	1
8回	1	0	0	0	1
計	77	13	14	16	34

表3. アンケート回答回数ごとの参加学生の内訳

アンケート回答回数	人数	1年生	2年生	3年生	4年生
1回目	77	13	14	16	34
2回目	37	10	13	6	9
3回目	17	3	8	4	3
4回目	5	2	0	1	3
5回目	4	0	0	1	3
6回目	3	0	0	0	3
7回目	2	0	0	0	2
8回目	1	0	0	0	1

表4. 各項目の1～3回目の平均値

項目内容	1回目	2回目	3回目	1～3回目の平均値
1. 私は子どもへの関わりが好きである。	3.81	3.81	3.82	3.81
2. 私は保護者への関わりが好きである。	3.03	3.03	3.24	3.10
3. 私は子どもへの関わりに自信がある。	2.57	2.57	2.65	2.60
4. 私は保護者への関わりに自信がある。	2.09	2.09	2.24	2.14
5. 私は今日のボランティアで、子どもへの関わりが楽しいと思った。	3.70	3.70	3.82	3.74
6. 私は今日のボランティアで、保護者への関わりが楽しいと思った。	3.32	3.32	3.47	3.37
7. 私は今日のボランティアで子どもとの関わりで、充実感を感じた。	3.36	3.36	3.53	3.42
8. 私は今日のボランティアで保護者との関わりで、充実感を感じた。	3.05	3.05	3.06	3.05
9. 私は今日のボランティアで、子どもへの関わりが上手くできた。	2.70	2.70	3.13	2.84
10. 私は今日のボランティアで、保護者への関わりが上手くできた。	2.51	2.51	2.59	2.54
11. 私は今日のボランティアで、親子の関わりについて発見や学びがあった。	3.39	3.39	3.59	3.46
12. 私は今後も子どもへの関わりの力をつけていきたい。	3.94	3.94	3.94	3.94
13. 私は今後も保護者への関わりの力をつけていきたい。	3.95	3.95	3.94	3.95
14. 私はこれからも子どもに関わるボランティアがしたい。	3.86	3.86	3.82	3.85
15. 私はこれからも保護者に関わるボランティアがしたい。	3.78	3.78	3.82	3.79

(2) アンケート結果

表3にアンケートに回答した回数ごとの人数を示す。4回目以上回答した人数は1～5名と少数であり、4回目以上の各アンケート項目の平均値は、学生の個人要因が反映される可能性が考えられる。そこで、回答人数が10名以上の1～3回目の各項目の平均値を表4に記す。

表4のように、項目1、2、5、6、7、8、11、12、13、14、15は3.10～3.95と3.00以上であった(得点範囲は1.00～4.00)。これらのアンケートの項目は子どもや保護者との関わりや子どもや保護者を対象としたボランティアへの肯定的な意識について問うものであり、参加した学生はそのような意識が高いといえるだろう。特に項目12、13は得点が4.0点中3.9以上であり、ほとんどの学生は子どもや保護者に関わる力をつけていきたいと前向きな意識を持っていたと考えられ、これは1回目から3回目まで変化はほとんどなかった。つまり学生たちはボランティアを経験する前も経験した後も、一貫して子どもや保護者への関わりについて向上心を持ち続けていると考えられ、学生の学ぼうとする意欲の高さがうかがわれた。

一方で1～3回目の平均値が3.00より得点が低かったのは、項目3、4、9、10の4項目である。これらは日頃の子どもや保護者への関わりへの自信やボランティアでの上手くできたという実感である。学生は子どもや保護者への関わりに苦手意識を持っていることが考えられる。

また1回目に比べ3回目が高くなった項目は、「2. 私は保護者への関わりが好きである」「4. 私は保護者への関わりに自信がある」「6. 私は今日のボランティアで、保護者への関わりが楽しいと思った」「7. 私は今日のボランティアで子どもとの関わりで、充実感を感じた」「9. 私は今日のボランティアで、子どもへの関わりが上手くできた」「11. 私は今日のボランティアで、親子の関わりについて発見や学びがあった」の6項目であった。得点が高くなった6つの項目から、学生は1回目に比べ3回目の方が、保護者への関わりを肯定的に捉えたり、子どもや保護者への関わりへの自信や楽しさを感じられるようになったことが考えられる。そして回を

重ねるごとに発見や学ぶ余裕や気づきが生まれたことが考えられる。その中でも特に、「9. 私は今日のボランティアで、子どもへの関わりが上手くできた」は1回目に比べ3回目の方が0.43高くなっており、子どもとの関わりに手ごたえを感じるには、実際に子どもとの関わりを経験を重ねることが必要であることが考えられた。

4. まとめにかえて

みなみん利用の保護者へのアンケート調査結果から、初年度の取り組みにもかかわらず、みなみんが総じて親子にとって、安心の居場所となっていることが伺えた。以下保護者アンケートの結果から汲み取れる成果やみなみんの今後の課題をいくつか述べてみたい。

みなみんは、開設時間が2時間と短く、開催頻度も原則月2回と少ないものの、予約不要、出入り自由、ノンプログラムというやり方をとっており、これは近隣の子育て支援センターの取り組み方と基本的には共通するものではないかと思われる。他方、みなみんの独自な点としては、大学内にあることから、学生たちが参加していること、大学の専門スタッフが複数位置づいていることである。学生の対応についてのアンケートの回答から、ほとんどの保護者が満足していることが伺えた。学生と触れ合うことは、子どもにとってだけでなく保護者にとっても新鮮なものであったのではないだろうか。また、帰りの会での学生の、手遊びやパネルシアター等のパフォーマンスは、未熟な面も多いものの、子ども・保護者に楽しんでもらえたようである。これは学生にとっては、子どもたちや保護者を前にして演じる貴重な経験になり、技量を向上させる必要性を自覚するいいチャンスにもなっている。専門スタッフの存在については、アンケートで直接問うことはしなかったが、実施中に子どもの育ちや子育て上のちょっとした悩みの相談を受けることがあった。専門スタッフが配置できることは大学ならではの「持ち味」といえるものであるから、気軽に相談できる雰囲気づくり等を今後一層工夫していきたい。

環境面では、遊びスペースがワンフロアという

制約があるものの、授乳室は別室に確保されており、環境的にはまずまずといえる。また、遊具類は木製の質の良いものや、0歳児用の手づくりおもちゃなどを整備してきている。みなさんが「よかった」の回答の中には遊具に関する評価も入っているのではないと思われる。今後も意識的に「質の高い」遊具をそろえていきたい。ところで、参加人数が20組を超えると落ち着いて遊んだり、保護者同士で交流するゆとりが失われてしまう。夏休み期間に通常は幼稚園に通園している「きょうだい児」の参加もあり人数が増えたことがあった。その際は、年長児たちの遊び空間として別室を急遽準備したが、今後、参加人数との関係で遊びのスペースについて検討する必要がある場合も予想される。これも今後の検討課題の一つといえる。

最後に、参加学生へのアンケート調査結果に関連して、1点だけおさえておきたい。調査項目は、例えば「1. 私は子どもへの関わりが好きである。」「2. 私は保護者への関わりが好きである。」というように、ほとんどが、子どもと保護者が対になった項目で構成されている(15項目中14項目、すなわち、7対)。そこで、子どもと保護者の項目を比較すると、保護者への関わりに関する項目の平均値は、子どもへの関わりに比べ、一部(12.と13.)を除いて、いずれも低くなっている。日常的に保護者と関わる機会が学生にはほとんどないことから、保護者との関わりには戸惑いを感じることは当然であろう。しかし同時に、保護者への関わりに関する1回目から3回目の数値の推移をみると、ほとんどが上昇している。(このことは前項で触れられている。)みなさんへの参加を通して保護者との関わりを経験する中で、保護者と関わることの抵抗感が少なくなってきたことが伺える。みなさんという保護者支援の場が、学生にとって身近な場である学内にあることの意義についても改めて確認できる結果であるといえよう。

引用文献

春日由美・宮内孝・古賀隆一・金子幸・黒川久美(2016) 2015年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究 6, p121 - 125